

リフォーム前後の写真



①クローゼット 壁下地の間柱を露出しDIYの自由度を高め、モノの集積を受け入れる空間とした



②オフィス 躯体表しをシルバー塗装した無機質な空間



〈改修前〉
④従前プラン 各室が分断された構成

⑤解体後



③洗面台



④クローゼット壁面の開口



⑤小窓から家族を見守る



⑥珪藻土塗り壁のリビング



⑦クローゼットとシームレスに繋がる



⑧クローゼット上部は収納として活用

photo by Tomohiro Sugiura

リフォームの動機／設計・施工の工夫点／施主の感想・満足度／住宅の価値を向上させた内容など

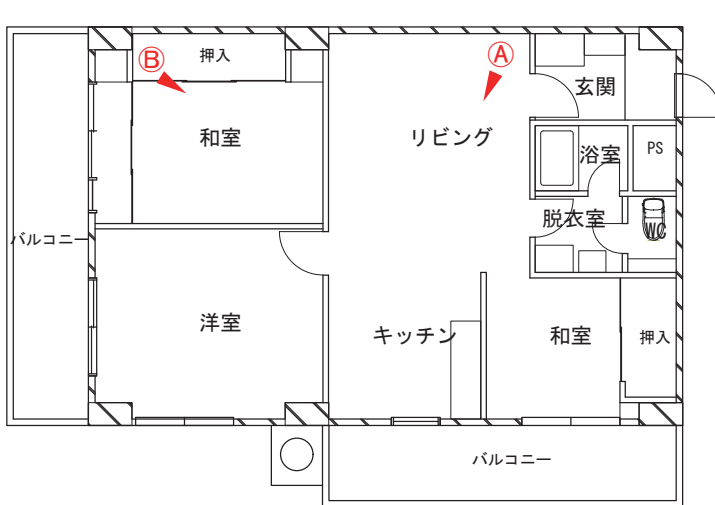
マンション住戸の改修計画。夫婦とこれから生まれる子供が暮らす家を設計した。また、子育てを想定した間取りを検討する上で、家族の適切な距離感を重視した。テレワーク等が可能な独立性と、家族を見守る繋がりを両立する「つかずはなれずの関係」を目指した。空間を仕切るクローゼットはスラブまで立ち上がない入れ子状の構成とし、壁には開口をバランスよく配置することで各室が分断され過ぎず、家族が互いの気配を感じられるように配慮した。クローゼットにより、モノ（＝思い出）が増えるライフスタイルを許容するこの住宅は生活感をなくすことに躍起になっている現代住宅とは対照的なモデルケースとなる。

審査基準のうち右記に該当する場合は ☒ a.ストックの有効活用 / ☐ b.深刻化する技能者不足への対応 / ☐ c.既存住宅流通・リフォーム市場の拡大・活性化

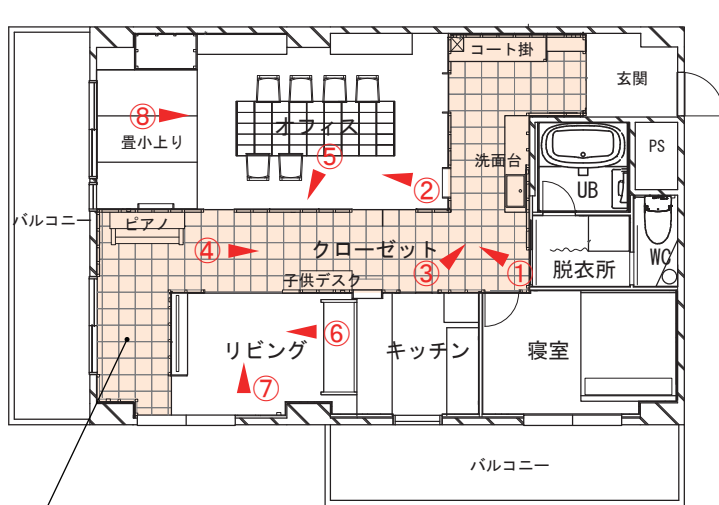
性能向上の特性	特に配慮した事項	lw 値、ls 値
断熱性能、バリアフリー性能、子育て性能 テレワーク対応、収納量拡大	リビング・キッチン・寝室側壁面に新規断熱材施工。床全面改修による段差解消。 間仕切り壁に開口部を設けることで、空調機数を削減したほか、子育てのための視線が通る計画とした。 大きなテーブル配置によるテレワーク対応。ウォークスルークローゼットによる収容量拡大。	リフォーム前 リフォーム後

データ					
所在地	神奈川県川崎市高津区	新築竣工年	1974 年	築後年数	51 年
施工期間	120 日間	該当工事床面積	77 m ²	総工事床面積	77 m ²
該当部分工事費	1,000～2,000万円未満	総工事費	1,000～2,000万円未満	居住者構成	65 歳以上： 人 / 40～64 歳： 人 / 15～39 歳： 2人 / 14 歳以下： 1人 / ペット

リフォーム前の平面図



リフォーム後の平面図



中央に配置した大きなクローゼットが生活のコアとなる

リフォーム部位： ☐ 居室 / ☐ 台所 / ☐ 浴室 / ☐ 便所 / ☐ 洗面所 / ☐ 廊下 / ☐ 階段 / ☐ 玄関 / ☐ インテリア / ☐ マンション共用部分 / ☐ その他

一般社団法人 住宅リフォーム推進協議会会長賞

講 評

第一印象は、奇を衒ったアイデアに映った。地と図が入れ替わったようなプランで、通常なら隅に追いやられる収納スペースが、まるで主演の様に中央に置かれている。このプランをどのように住みこなしているのか、実際に現地を見て確かめたくなった。

設計者でもある施主は、子供が生まれるのをきっかけに広い物件を探し、築古ながら適切に管理された耐震診断済みのこのマンションを手に入れた。自分たちの住まい方を冷静に分析し、モノに溢れた暮らしを許容する機能としてこのプランに辿り着いたという。また子育てには家族の適切な距離感が重要と考え、動線を兼ねたクローゼットを家の中央に貫通させて、それぞれの居場所が開口から見え隠れする関係を造り出すとともに、暮らしをバックアップする空間に活用した。

内装はウチとソトを強調すべく、居室部分にはそれぞれ仕上げを施し、クローゼットはラワンの壁・天井でトンネル状に仕上げられていた。予算的な都合もあったそうだが、均等に配置された間柱と片面ベニヤ貼りで仕上げられた空間はまるで舞台セット裏のようで、下地や電気配線が現しとなっていて将来の改変を容易にしている。まさに「暮らし」というステージを支える舞台裏であることを象徴していた。

暮らし始めてさぞ生活感が溢れているものと期待？したが、現地を訪ねると拍子抜けするくらい整理整頓されていて、モノが溢れるどころか綺麗にディスプレイされていた。ご家族に尋ねてみると、モノがいつも見えることで取捨選択が進み、本当に必要なものだけを選ぶ習

慣が身についたという。何でも容易に手に入る世の中だからこそ、趣味や個性をオープンにすることは暮らしを豊かにする良いアイデアなのかもしれない。これから子供が大きくなって、様々なモノが増えてくると思うが、この空間がどのように変化していくのかが楽しみである。

現地を見て改めて感じたのは、この構成が京都の町家によく似ていることだ。このクローゼットはまさに「通り庭」であり、ハレとケを繋ぐ動線でありながら、玄関から庭（バルコニー）に至る光と風の道となり、暮らしを支える機能空間となっている。

分譲マンションでは、長らく「田の字型」と呼ばれる中廊下型のプランが採用されてきたが、往々にして個室が分断され閉鎖的になりがちである。しかも個室に分散された収納は死蔵品を生み出すきっかけとなり、ひいては個室にモノが溢れ一部屋丸ごと納戸になってしまうことも少なくない。廊下は効率よく個室を分けるには都合良いが、移動のためだけに使うのは勿体無い。少し幅を変えるだけで、様々な用途が生まれることに改めて気付かされた。

設計者自身の住まいということで、多分に実験的な要素が含まれているが、移動空間に機能を与え、結果的に暮らしを整える空間になりうることを示した意欲作と言える。モノに溢れた暮らしを逆手に取ったこの考えは、新たなマンションプランの発明とも言える作品で、住宅リフォーム推進協議会会長賞にふさわしい作品と評価した。